
Anecdoter`s-**眼の無い主と双子の従者-**

いえしき てびし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A n e c d o t e r、s - 眼の無い主と双子の従者 -

【Nコード】

N 0 0 6 2 C

【作者名】

いえしき てびし

【あらすじ】

これは昔々から始める話。登場人物の数は3。変わらない、あまりに変化のない、無常とはかけ離れた日常。これは或るお話。

むかしむかし、或るところに。

この話はそこから始まります。

貴方は同じような冒頭の物語を、何度読んだことがあるのでしょうか。

この話も、その一つです。

登場人物の数は3。

その、日常です。

変わらない、あまりに変化の無い、無常とは掛け離れた。

これは或るお話。

昔、昔。或るところに、双子の従者がいました。

二人には、エンリケという名前の一人のご主人様がいました。

二人には、名前がありませんでしたがエンリケによってヴァレッ

トとヴァリットと呼ばれていました。

二人は、エンリケが大好きでした。

二人は、今日もエンリケを起こしに寝室へ向かいます。

『おはようございます、主様。起きる時間です』

ヴァレットとヴァリットは、エンリケの枕元に立って声をかけます。エンリケの目が薄く開かれると、ヴァレットはカーディガンの準備をしました。

「おはよう、私のヴァレット、ヴァリット。今日の機嫌はどうだい？」

『相も変わらずに』

ヴァレットにカーディガンをかけてもらい、エンリケはベッドから下りて二人の頬にキスをしました。そして顔を洗い、歯を磨き、また部屋に戻ってきました。二人はずっとエンリケの後ろについています。

「ヴァレット、今日の予定は何か？」

「今日のお客様は三人。午前に一人、午後に二人です」

エンリケは脱いだ服をヴァレットに渡しました。

「今日の朝食はなんだい、ヴァリット？」

「今日はワッフルをご用意しました」

ヴァリットから服を受け取って、エンリケは着替えを済ませました。

そして食堂へ向かいます。二人はエンリケの後ろについています。

「いただきます」

『いただきます』

高い天井と、長いテーブルのある部屋で、エンリケは朝食を食べます。体が半分くらい小さく見えるところで、二人も食事をしていきます。

「ごちそうさま」

『ごちそうさまでした』

食事が終わると、二人はエンリケが仕事に行く用意をします。

コートを着るのを手伝い、帽子を差し出します。エンリケはりっぱな紳士姿になって、そして階段のところに立ちました。

ヴァレットは、細くて長い剣を持ち、ヴァリットはエンリケの鞆を抱えて階段の下に立っています。

すぐに乾いた音が聞こえてきました。馬車が迎えにきたのです。

ヴァレットがドアを開けると、エンリケとヴァリットが乗りました。ヴァレットはドアを閉めると、馬車の前の所に座り、ぴしりと鞭を打って馬を促しました。

ゆつくりと、馬車が動き出しました。エンリケとヴァレットとヴァリットだけを乗せて、二頭の馬はヴァレットのたずなのとおりに進みます。

右にも左にも樹木しか見えない景色が続く道を、一台の馬車が軽快に進みます。

声は何も聞こえません。蹄の音と、車輪の音と、馬車が軋む音以外は森の音しかしません。

しばらくすると、大きな門がありました。その両端は、ずっと遠くまで塀が続いています。ヴァリットが馬車から降り、ポケットから大きな鍵を取り出して門を開きました。馬車が門の外に出た後、鍵をしてヴァリットはまた馬車に乗り込みます。

門の外は、たくさんの方が行き交う賑やかな街でした。土から石畳に変わった道を、馬車は軽快に進みます。そして、もっと賑やかになってきた道に出ると、端に寄せて停まりました。ヴァレットは駆け寄ってドアを開けます。

最初にヴァリットが降りてきて、目の前に建つ建物へ走って行きました。次にエンリケが降りてきました。ヴァレットはドアを閉め、エンリケの後ろに続きます。

ヴァリットが開けた扉にエンリケとヴァレットが入っていき、ヴァリットは最後にドアを閉めて鍵をかけます。道路には、たくさんの馬車が走っていました。

建物の中で一番大きな部屋に着くと、エンリケはヴァレットにコ

ートと帽子を渡し、奥の椅子に座りました。ヴァレットがコートと帽子を掛けている間、ヴァリットはエンリケに紅茶をいれます。それとは別のティーセットを用意し、部屋の真ん中にあるテーブルに置きました。

エンリケは窓辺の近くの椅子に座り、静かに紅茶を飲んでいます。ヴァレットとヴァリットは、部屋の隅で静かに座っています。外では馬車の音と人の声が行き交っています。

突然ヴァレットが椅子から立ち上がり、部屋から出ていきました。ドアが閉まると、ヴァリットはポットを持って別のドアから部屋を出ていきました。下の階から女の人の声がします。

「貴方がMr. Henrique？」

「ええ、マダム。まずはこちらへ」

ヴァレットが戻ってくると、その後には女の人と男の人が一人ずついました。エンリケが女の人に椅子を勧めると、ヴァリットが戻ってきて、テーブルの上のカップに紅茶をいれました。

そして二人は元のように部屋の隅に座りました。

女の人は、じっとエンリケを見えています。

男の人は、ずっと女の人を後ろから見えています。

二人は、ただその三人を見えています。

エンリケは、手を組んで座っていました。

エンリケの仕事をするための建物には、いつも難しい顔をした人がやってきて、難しい話をエンリケとして帰っていきます。

二人は、やってきた人を出迎えたり、送ったり、紅茶をいれたりすること以外は、動かずにずっと座っています。

二人は、エンリケが何の仕事をしているか分かりませんが、何も気にしませんでした。知る必要はないと思ったからです。

二人は、エンリケの仕事をする姿が大好きでした。

エンリケの今日の仕事が終わります。

「それではこれで」

「はい、本当に…ありがとうございました」

今日最後の難しい顔をした男の人が椅子から立ち上がりました。ヴァレットが開けたドアから外に出ていきます。

ヴァリットは、男の人が飲んでいた紅茶を持って、別のドアから部屋を出ていきました。エンリケは、紅茶を飲んでいます。

「それじゃあ、ヴァレット、ヴァリット、お家に帰ろうか」

『はい、主様』

「ヴァリット、今日の夕食はなんだい？」

「今日はローストビーフとローズマリー油のリキュールをご用意しました」

飲み終わった紅茶を、エンリケはヴァリットが持つトレイに置きました。

「昨日は何の話をしたかな、ヴァレット？」

「昨日は荊の城で眠るお姫様のお話をしてくださいました」

ヴァレットが掲げたコートに袖をとおし、帽子を被り、エンリケは朝と同じ姿で扉へ向かいました。ヴァレットは細くて長い剣を持って、エンリケのためにドアを開けました。ヴァリットは鞆を抱えて、エンリケの後ろに続きました。

館をでると、エンリケは左の方へ歩き始めました。ヴァレットはドアを閉め、ヴァリットは鍵をかけて、エンリケの後ろに続きます。朝通った門の所まで、エンリケも、ヴァレット、ヴァリットも口を開きません。

朝と同じように、ヴァリットが鍵を開けて、中に入ります。

今度はヴァレットとヴァリットの後ろに、エンリケが続きます。

「今日は高い塔に住むお姫様のお話をしよう」

『はい』

森の中に一本しかない道を歩きながら、エンリケは二人が知らないお話をします。それを二人は静かに聞いています。

ガサリという音がして、黒いものが飛び出してきました。

ヴァリットは、エンリケの前に立ち、黒いものが投げてきたキラキラと光るものを掴みました。ヴァレットは、持っていた剣を鞘から抜き、黒いものへと走り寄りました。

ヴァレットの手が物凄い速さで動き、素早く動く黒いものを二つ、三つにしました。

別の所からまたキラキラと光ものが飛んできましたが、ヴァリットの手には捕まります。それが飛んできた所に、ヴァレットが駆け寄り、別の黒いものを五つにしました。澄んだ音がして、ヴァレットの持つ細い剣が折れました。

ヴァレットの体は、黒いものから出た水で汚れてしまいました。ヴァリットの手は、たくさんの裂け目が出来ていました。

二人が振り返ると、エンリケはニツコリと微笑みました。そして、途切れたお話の続きを続けました、また、ヴァレットとヴァリットは、エンリケの後ろに戻りました。

道には暫く、ヴァレットから滴る雫が続いていました。

館に着くと、もう真っ暗です。

ヴァリットはエンリケからコートと帽子を受け取り、仕舞いに行きました。そして、夕食の準備をしに行きました。ヴァレットはエンリケと一緒にお風呂に行きました。エンリケと一緒に服を脱ぎ、大きなたらいに水を張って全身に付いた汚れを洗ってもらい、エンリケの背中を流しました。

エンリケが泡でいっぱいのお風呂に入ると、ヴァレットは出て行き、今度はヴァリットがやってきて体を洗ってもらい、エンリケの髪を洗いました。そして、出て行きました。

エンリケは、泡の中でまどろんでいます。

『夕食の用意が調いました』

うつらうつらとしていたエンリケは、二人の声に顔を上げ、体の泡を洗い流しました。

綺麗になった体を、ヴァレットとヴァリットは大きなタオルで拭き、新しい服を着せました。

「いただきます」

『いただきます』

高い天井と、長いテーブルと、何本もの蝋燭がある部屋で、エンリケは夕食を食べます。体が半分くらい小さく見える所で、二人も食事をしています。

「ごちそうさま」

『ごちそうさまでした』

食事が終わると、エンリケは寝室である温室へ行きます。

ヴァレットは朝の分とまとめてお皿を洗い、片付けをして、ヴァリットは紅茶を用意して、エンリケの所へ行きます。

エンリケは、月明かりの下に座っていました。

一日が終わった後、エンリケは二人が眠くなるまで色々なお話を聞かせてくれます。それは、二人が全く知らない国の話です。

この時、エンリケの所にはお客さんがやってきます。二人の眼にはふわふわとしていて、透き通った様に見えるお客さんは、二人に分らない言葉でエンリケとお話をして帰っていきす。

二人は、エンリケが話す声が止まってしまうので、お客さんがくると少し残念に思いますが、お客さんの声は綺麗なので、嫌とは思いませんでした。お客さんが出ていくと、エンリケはお話の続きを続けます。

二人はエンリケの話すお話が大好きでした。

エンリケのお話が、終わります。

「おいで、私のヴァレット、ヴァリット」

二人が眠そうになった頃、エンリケは二人を呼びました。この時だけ、二人は仕事以外でエンリケの近くに行けます。ヴァリットは、喜んでエンリケの膝の上に座ります。ヴァレットは、遠慮して足元に座りました。

「おやすみ、可愛い私のヴァリット。良い夢を」

「おやすみなさいませ、主様」

エンリケは、ヴァリットの背中を軽く叩いて、額にキスをしました。

「おやすみ、私の愛しいヴァレット。良い子で」

「おやすみなさいませ、主様」

エンリケは、ヴァレットの頭を撫でて、額にキスをしました。

そして二人は、

目を閉じ、

眠りにつきました。

そして、目を開きました。

二人は、硝子ケースの扉を開けると、エンリケを起こしに彼の寝室へ行きます。

横たわるエンリケの枕元に立ち、声をかけます。

ずっと

ずっと。

二人はエンリケが大好きでした。

とても

とても、

大好きでした。

e
n
d

（後書き）

謎は謎のままで。

明かされるのはもう少し先、ということ。

二人はいつでも主と一緒になのです。

誤字脱字がありましたので修正しました。

お知らせして下さった方ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0062c/>

Anecdoter`s-眼の無い主と双子の従者-

2010年10月11日12時07分発行